

第2節 埼玉県立杉戸農業高校教諭に任ぜられる

1. 着任の経過と初年度の頃

着任

昭和41年4月、埼玉県立杉戸農業高校の教員になった。秩父出身である杉戸農業高校の坂本先生が、秩父市立秩父第二中学校の校長先生齋藤政二先生に会いに来て、私を杉戸農業高校に迎えたいとおっしゃられた。私もその席に呼ばれて坂本先生にお会いした。杉戸に行くには、ピアノを運ばなければならない。夜もピアノを弾くので近所迷惑にならないように、学校の近くに家が欲しいと言った。自分で家を探すのが当然で、私を杉戸農業高校に迎えたいと第二中学校にいらっしゃった先輩の先生に向かって「俺の住む家を探せ」と言ったことになる。誠に失礼な発言であるが、坂本先生は私の希望を引き受けてくださった。

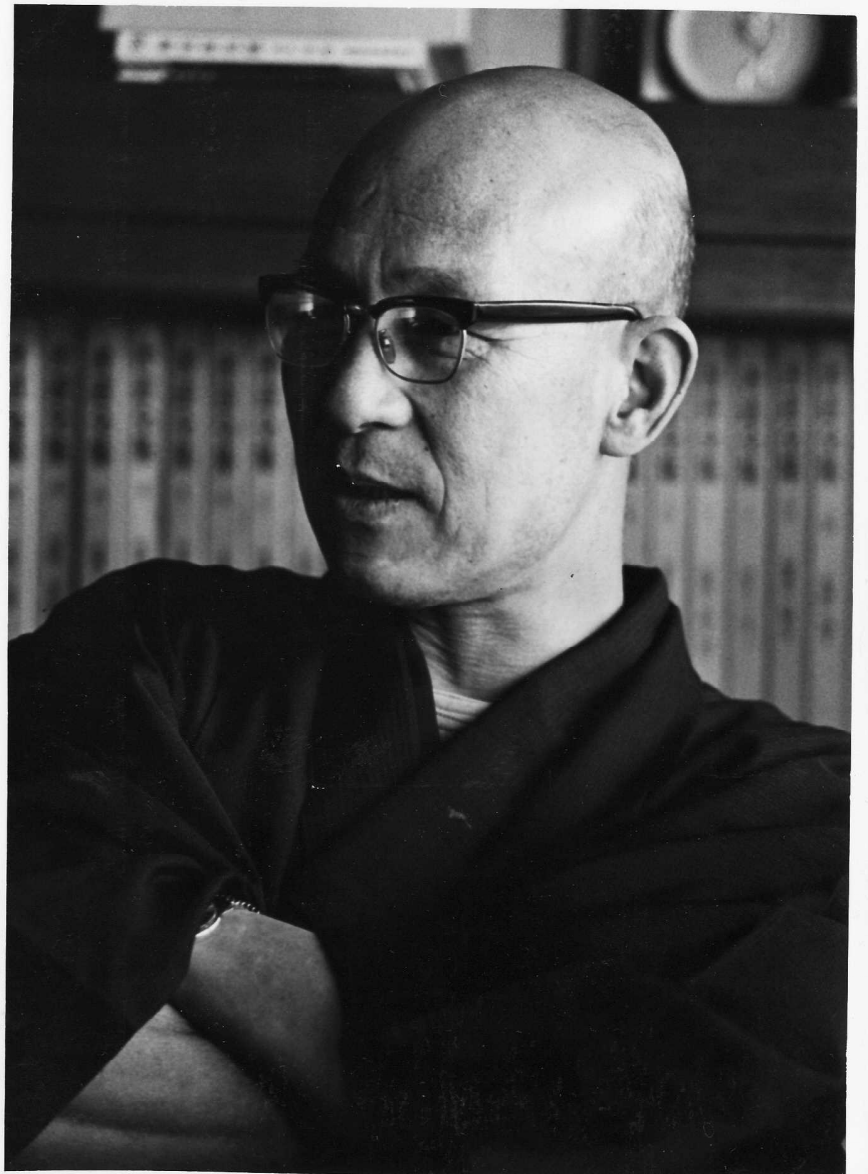
担任

私は農業科1年生の担任になった。N1Dと呼び、Nは農業科を意味する。教室での生徒の話、職員室での先生方の話が、当時の杉戸は埼玉東部地方の方言なまりが強くて、この地方の人達の会話が半分くらいしか聞き取れず、慣れるのに1年位かかった。今でもお年寄りの人達は、なまりが残っているが、私にはしっかりと話わかる。50名の男子生徒の名簿を見ると、全生徒の親の職業が農業、全員長男であった。第二中学時代の生徒名簿と比べて、とても印象深かった。秩父第二中学校時代には、あれほど一生懸命生徒と一緒に過ごした私が、杉戸農業高校に来てからは、生徒達の方から教師に近づかないことも事実であるが、生徒達のことを頭から離れている自分自身に気づいた。これが高校生というものか。

小菅秩嶺

昭和41年11月13日午前10時21分父小菅秩嶺が58歳で他界した。肝臓癌だった。私が秩父を離れる頃の父は元気だった。父が忘れ物をして、私が自転車で届けたときのことだ。埼玉大学に行くために御花畑駅歩いて向かう父が、うんうんうなり声を上げながら歩いていた。見過ごしていたことが、他界された後に後悔として悔やまれる。父は晩年になって飲めない酒を飲むようになった。門下生を中心に蒼雲会を発足させて、書道月刊誌「清真」を立ち上げ、「清真」の編集に出席者とお酒を飲んでいて。列車に乗るときにウスキーのポケット瓶を持って歩いた。あんパンを肴にしてウスキーを飲んだ。今思うと無茶苦茶だ。

秩嶺は秩父郡小鹿野町泉田、小菅家の長男として生れたが、父親小菅兼治郎の代に営んでいた梅鉢屋が廃業。埼玉師範学校を苦学して卒業。昭和15年4月長野県立飯田商業学校（旧制中学）、秩父商業学校、秩父高校を経て埼玉大学在任中に他界した。日本美術展覧



小菅秩嶺(昭和40年頃)

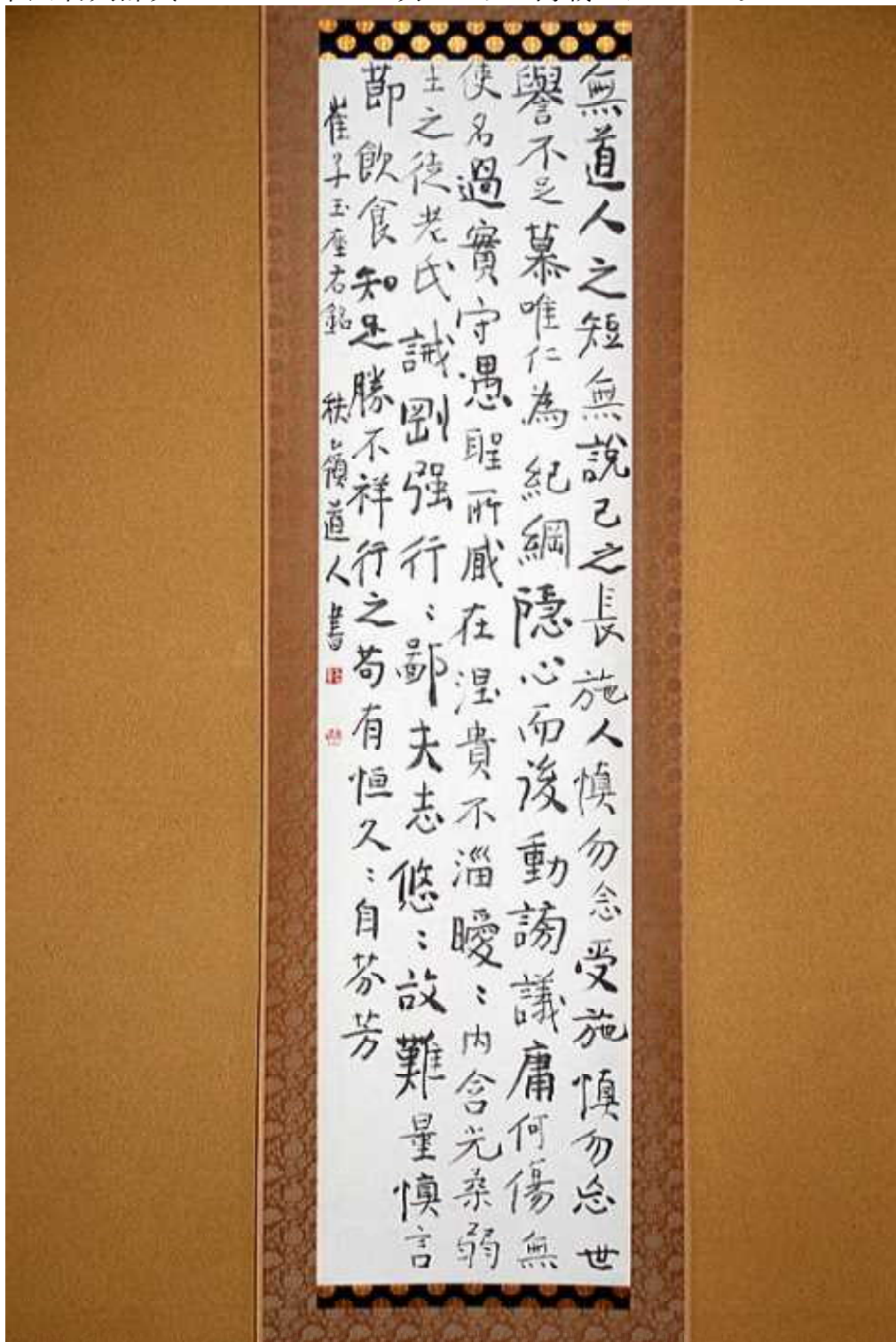
会に出品した作品すべてが入選し、特選を受賞して依頼作家の書道家だった。
インターネット・デジタル版日本人名大辞典Plusのkotobankに次のように掲載されている。

小菅秩嶺 こすげ - ちつれい

1908 - 1966昭和時代の書家。明治41年8月30日生まれ。津金鶴仙(かくせん)にまなぶ。埼玉大教授、毎日書道展審査会員などをつとめ、蒼雲会を主宰した。昭和41年11月13日死去。58歳。埼玉県出身。埼玉師範卒。本名は武雄。

私は手記に次のようにつづっている。

「私は父を信頼し、尊敬する。あの人格は人を引きつける何かを持っていた。社交家であった。それにひきかえ僕はどうかだろう。何という神経質人間だろう。このようなしつこい性格では、生徒はおろか友人にも、上役にも頼りない人間とわれるに相違ない」。その後一ヶ月半が過ぎて「最近の僕は変わった。誰とでも対等に会話が来るようになった。生徒も僕を慕っている。友人も交際してくれる。上司も信頼してくれる。全ての点で交際できるようになった。これは父から学ぶところが大きい」。私の持って生まれた性質は変わっていない。父の死によって少しは大人になったであろうが、根っこの部分は変わっていないのだ。明るく朗らかだが人を引きつけるような求心力は、はなから持ち合わせていない。企画力と実務能力があって、誠実に仕事をこなす力が、信頼感を持たれることは事実のようである。



崔子玉座右銘 小菅秩嶺書

和楽路会

杉戸農業高校における校務分掌で何を担当しかは、はっきりとは覚えていない。ただ、杉戸農業高校が移転した後の3年間、必修クラブ担当主任をやった。若い先生方が多く、私は後輩の先生方の結婚式披露宴の司会を頼まれて三回やった。杉戸農業高校に来た2年目、E1Bの担任になった。園芸科1年B組である。この学年はクラス替えをしながらも3年間担任し続けた。後に一生涯交際し続けたクラスの会「和楽路会」のメンバーである。

園芸科1年B組が卒業する時の手記に次のようにつづっている。「今年は昭和42年入学の私のクラスの生徒達が卒業する年だ。彼らはあと一ヶ月で事実上学校と別れを告げる。ある者

は早く卒業したいと思い、ある者はやりかけた一つの目的を仕上げようとあくせくし、ある者は卒業を間近に控えて考えにふけり、ある者は一つの信念を見つけて惑わずにいるに違いない。私は、この三年間を振り返ってみると、HR教師としてなにをやってきたのか疑問である。一つの信念らしいものは持っていた。それは、1年は徹底的に教育し、2年では一定方向に指示を与えるに留め、3年になったらともに語れるような生徒にしたい。これが信念であり、希望でもあった。

確かにそれらしい形になった。最近、生徒が私の所に遊びに来て、話をして帰って行く。その場の雰囲気は、なかなかいい。いろいろな話題に花が咲く。園芸科3年B組のときに、一学期末球技大会、二学期の運動会、三学期のマラソン大会で生徒とクラス担任が一丸となって頑張った。1年2年のときも頑張ったが、上級生がいるので、どう



和楽路会同窓会（昭和58年）

しても上位には食い込めなかった。3年になって、このときとばかりに張り切ったのである。結果は球技大会でも運動会でも優勝できなかつた。その後、一段とクラスの団結を強め、結束したことが、三学期マラソン大会での優勝へとつながり、「和楽路会」と命名して、終生の交際が続いているのである。私は殆どの担任した生徒達の結婚式に恩師として招かれ、仲人もやった。何度か同窓会が鬼怒川で開かれて、私が酔いつぶれた。私が新築したときの引っ越しに車を出してくれて、ピアノ曲集「可憐なる小さき歌」楽譜出版記念祝賀会、定年祝賀会を開催してくれた。平成17(2005)年11月「和楽路会」のメンバーから石川良三春日部市長が誕生した。残念なことであるが、平成16年以降、三人の葬式が出てしまった。その後、二周りの6年間園芸科の担任をしたが、これほど強い絆で結ばれたクラスは出なかつた。

3. 杉戸農業高校時代の部活動

吹奏楽連盟

春日部高校の杉山先生にその後お会いしたのは、杉戸農高に私が着任して、東部の音楽の先生方と飲んだとである。定刻少し前に会場に行くと、杉山先生もお見えになっていて、しばらく二人だけで、お話しする機会を得た。秩父の時代に滝沢先生の代役として大宮桜木中で行われた吹連理事会に出席する機会を得た。理事会のほとんどは、杉山先生ともう一人の副理事長との激論に終始したが、双方とも正論で甲乙つけがたかつた。東部に来た途端、当時東部の吹連責任者から2万円位のお金を預かって、お前がやれと言われた。以来吹連理事会に常に出席するような身になるが、埼吹連の体質は、30年間変わっていない。全員

が正論を持ちながら、激論を戦わせる。その上で議論が尽くされ後は、皆揃って決定された方向へ行動する。私が吹連東部支部の中心になり、吹奏楽講習会支部制導入により、杉戸農業高校で講習会を行った。東部支部の吹奏楽部がすべて参加した。楽器の演奏法も分からぬまま指導していた顧問が多かったのも、極めて好評で成果も大いに上がった。顧問の先生方が楽器別に行われている各部屋を回り、講師の説明を一言一句聞き逃すまいと、一生懸命傾聴していた。今では常識とされる基本的事柄に生徒・顧問とも聴き入り吸収した。

杉農吹奏楽部

杉戸農業高校が私を呼んだのは、吹奏楽部を作りたいからである。行った当初の校長生は中村茂校長先生で、教頭の石井先生が、娘の夫である草加高校音楽教諭の深田先生に頼んで幾つか楽器を購入し、部員も何人かいた。当時の手記に私は次のように書いている。「満一歳五ヶ月の赤ん坊。四月に着任してから1年の三分一のが過ぎた。思えば感無量。本校の吹奏楽部は、私が着任する前の7月に発足し、まだ1年五ヶ月しか経っていない。長い伝統を持つ大先輩の学校と比べると、やっと立つことの出来るようになった赤ん坊である。私としては親として、この赤ん坊が、将来健康な青年に成長することを心から願っている。周知の通り、本校は農業専門高校である。実業高校なら部活動は活発にできるだろうと思っただらとんでもない。部活動の妨げになる、幾つかの問題を持っている。入ってくる生徒の家庭すべてが農家である。一学期当初の田植え、夏休み中の果物の収穫準備、秋の刈り入れ等、部活動を阻害する大きな問題をかかえている。生まれながらにして、杉戸農業高校吹奏楽部は、持病を持っていたわけである。他の学校では、4月から7月までは、技術を向上させる最も充実した期間であるのに対して、本校の生徒達は田えに専念しなければならない。そのために部員の過半数が毎日部活を欠席する。部活を欠席するなどと言っても通用しない。家の大事な働き手を取り上げることになるからである。顧問としては、他の学校が着々と実力を向上させていることを思うと、居ても立っても居られない。夏休みの合宿で「現実には厳しいね」が合い言葉になったが、まだ悩むのは早い。満一歳五ヶ月の赤ん坊だからである。赤ん坊は、ただただ成長することだけを考えればよい。悩むのは16年後に悩むのだ。そして一大発展に向かって進む。

埼玉県内では最も早い時期に始めた定期演奏会「杉農フェスティバル」を杉戸町役場の隣にある「上原会館」で10年間続けた。埼玉県吹奏楽祭が秩父二中学校体育館の「こけら落とし」で行われたが、埼玉県内では、こうした吹奏楽演奏会が主流であった。単独校定期演奏会の開催は、杉農フェスティバルが、埼玉県内では初めてではなかったかと、私は思っている。このことは秩父第二中学校の頃に滝沢先生が産業館で、秩父農業高校、小鹿野高校秩父第二中学校の三校合同吹奏楽演奏会を毎年開催していた経験から、ごく自然にやったことある。

吹奏楽コンクールの前に、課題曲と自由曲を演奏する機会が欲しい。

杉戸農業高校生や先生方、杉戸町民がたくさん聴きにきた。杉戸農業高校吹奏楽部は、着実な活動を続けた。農業クラブ全国大会「埼玉」の開会式で演奏し、小編成ではあるが、1972年のコンクールから3年連続して金賞2回、銀賞1回を受賞した。杉戸農業高校が移転した後は、50人の大編成に出場したが残念ながら2回とも受賞できなかった。



吹奏楽コンクールでの指揮（昭和43年）

4. 転勤を考えた

私の教師としてのエネルギーは、杉戸農業高校に着任して8年間続いた。杉農が堤根の地に移転するまでである。移転後、部活動の女の子一人が退部した。私は35歳になっており「自分の若さが通じなくなった」と感じた。年齢の開きができて、生徒達と友達感覚ではつきあえなくなった。女の子達を引きつける若い魅力がなくなったのだ。そこにいたって、初めて転勤を考えるようになった。それまでは、私が着任してからの二代目の、羽鳥匡夫校長先生をはじめ、吉岡教頭先生、先輩の先生方や同年配の友達とよく酒を酌み交わしたが、何と言っても、生徒達との年齢の開きは如何ともしがたかった。杉戸農業高校の音楽教師は、若くなければだめだ。若さがある、生徒達を引きつけて、ぐいぐいと引っばっていくカリスマ性を持っていなければ、安定的成果は望めないと感じた。そこで、当時岩槻高校の教頭をしておられた、尾花勇埼玉県高等学校音楽研究会会長に「私をとって下さい」とお願いした。すでに別の若い女の先生を岩槻高校に内定していた尾花先生は、私を埼玉県立春日部高校の村越五郎校長先生に紹介してくださった。

杉戸農業高校には10年間いた。25歳から35歳までだ。8年経ったら吹奏楽部の女の子達がついてこなくなった。これは「年のせいかな」と思い、初めて転勤を考えた。それまで自分自身、体力気力ともに衰えを感じたことはなかった。授業は真正面から取り組んで、全県レベルの研究授業を行ったし、長距離大会練習では、クラスの生徒と毎朝学校のまわりを走ったし、コンクールで金賞もとった。でも生徒との年齢のひらきは如何ともし難い現実があった。

5. 杉戸農業高校時代の作品

杉戸農業高校時代に作曲した曲は数知れない。杉農フェスティバルで生徒達が演奏したアンサンブル曲がたくさんある。すべてをここに書き出すとスペースを取りすぎるので、後に私の作風をつくりあげた曲だけにとどめておく。

ピアノ・ソナタ第1番「景観」全楽章(1968.3.27作曲第5回葵の会初演1969)、ピアノ・ソナタ第2番第1楽章(1969.11.7作曲未1971第7回葵の会初演)、ピアノ組曲「十二支」(1976.1.15作曲全国学芸コンクール社会人の作曲部門第二席学芸奨励賞)。

ピアノソナタ「景観」は後の私の作風をつくりあげるきっかけとなった曲。私は27歳で結婚して、その翌年この曲ができた。ピアノソナタ第2番と組曲「十二支」はその延長線上にある。組曲「十二支」は毎年1曲ずつ、その年の干支を作曲していった。出来上がるたびに土肥先生に見て頂いて一曲の組曲作品に仕上げた。この三作品で杉戸農業高校時代の10年が過ぎたことになる。

6. 杉戸農業高校時代の私的できごと

埼玉県立杉戸農業高校時代の私の身のわりのでき事を書いてみる。昭和41年4月杉戸農業高等学校に着任と同時に杉戸町清地の古利根川沿い、杉戸農業高校の近くに一人転居転住した。昭和41年11月13日に父が肝臓癌で死去。58歳。昭和42年12月26日白石時子(昭和20年9月14日生まれ)と結婚、春日部市粕壁4035-7に転居し所帯を持つ。昭和43年4月妻時子、関東短期大に入学。昭和45年3月同校卒業。4月岩槻市立東小学校教諭に任ぜられる。昭和45年12月8日長女静華誕生のため、姉中村富司・廸代夫妻の住まいである大宮市大和田に移転。昭和48年10月15日今の春日部市東中野1133-10に新築移転。



春日部「大榎」での披露宴

7. 手記抜粋

昭和41(1966)年5月30日

教育音楽、私はそれを研究し、成果を挙げてみたい。視聴覚分野の開発、いまの自分には、その先端をいっている自信をもっている。表現能力では地域差が問題である。発声法の徹底と同一歌唱曲（合唱曲）の表現掘り下げを絡み合わせて、曲とともに発声法を習得させたい。最後に日本音楽の研究と実践化である。少なくとも西洋音楽と東洋音楽を対一くらいに持っていくことをやってみたい。創作の難点解決を日本音楽で図る。表現の分野にも入れる。鑑賞にも入れる。それには自己の研究が必要である。教具の拡充を図る。よし、やってみよう。

音楽に国境はないという言葉 1966年 7月7日

音楽に国境はないという言葉がある。現代の日本はまさにその言葉の通り世界各国の音楽が入り交じり、多種多様にラジオ、テレビを通して乱れとぶ。歌謡曲、ジャズ、タンゴ、ラテン、エレキ。列べてみるときりが無い。はて、そこで日本の音楽は…、となると、どれがそうなのか判らなくなってくる。家庭や学校で子供達が歌っている歌曲の大半が海のかなたのもの、市販のレコードの大半が海のかなたのもの。音楽界における日本の国民性はどこへ行ったのであろうか。私は音楽は分かりませんとは、お偉い人達から聞く言葉であるが、この現状を考えてみると当然のことであろう。これこそ日本の音楽だといえるものは、箏、三味線、尺八、笛太鼓の音楽。民族性を象徴する音楽は、遠い昔に忘れられかけている。

そこで日本の社会全般に眼を向けてみると、日常使っているものの大半、頭から足の先まで我々は洋化していることに気づく。「西洋のものはいいよ」というところを見ると、心も洋化しているのではあるまいか。マネの上手な日本人、もらい物の上手な日本人。しかし、我々は日本人である。日本人は何も持たないのか。そうではあるまい。茶碗がある。味噌汁がある。畳みがある。畳は我々から切り離すことの出来ない、憩いの場である。酒の席では、日本民謡の一つや二つ必ずてくる。子供達の心にも、いまなお童唄が生きている。外見や思想が、西洋的なもので装われても、感覚は取り替えることのできない国民性をもっている。音楽は若い世代だけのものではない。東京に行かなければ聴けぬものでもない。我々自身のものである。

願わくば、日本音楽を歌って頂きたい。日本音楽を家庭へ取り戻していただきたい。そしてそれを基盤に、誰が歌っても共通に、しっくりする新しい日本の音楽が生まれることを希望する。畳の上で、味噌汁をすすりながら聴ける、新しい日本の音楽を生み出したいものである。西洋音楽も結構。しかし西洋音楽はそれとして、受け止める必要があると思う。真髓が解らぬのも当然、所詮海のかなたの感覚だからである。日本音楽が、国際的な音楽となり、広く世界に広まったとき、音楽に国境はないとお互いに言おうではないか。

1965年 7月15日

期末の仕事も通知票を残すだけとなった。あとは夏季休業中の仕事だけだ。なにやら、仕事が終わってみると、そのたびに教師としての自分を思い知らされる。仕事が「お前は教師なんだぞ」言っている。僕は「教師じゃないやい」と言いたいが、やっぱり教師である。第一月給が少ない。また、教師でない人が、みんな頭を下げる。そんなに僕は偉いのか、という錯覚を感じる。大体僕は、教師という職業人を好かない。人が頭を下げるから、ずののる。教師が偉いから頭を下げるのではないのに。自分の子が教育される。またその人が教育された。その教師に直接関係なくても、自分が教育され、その子供が教育される立場にあるからこそ、そのありがたさに、頭を下げるのである。早く言えば恩に頭を下げるのであって、偉いのではない。当の教師は、このことが解っちゃいない。だから世間馬鹿と言われる。月給が安いくせに、ハイカラなものを身につけたがり、自動車を乗り回したがる。やることなすこと、すべてが高慢になる。世間の道理に疎くなる。じゃあ僕はこのような立場におかれて、どうならなくてはいけないのか。世間の人間を知ることである。交際する人の幅と層を厚くすることである。世の道理を知ることである。他の職業のすべてを、軽蔑してはならない。僕はそのような眼では見ないが、そう見る向きが多い。日々を愉快地に過ごしたい。すべてのわかった人格者になりたい。そこで危険のあるのは、理屈っぽくなることである。これもいけない。さっぱりして、しかも、ものの分かる人、そう言う人に僕はなりたい。

自分に問う 1966年10月29日

お前は毎日何を生き甲斐に生活しているのだ。お前は、学校で、何であるように活発に動き回り、さも何の不安もないように行動している。お前は、何のために、そう社交的に振る舞い、人の非難をかわそうとしている。生活に不安はないのか。これからの目的は何なのか。馬鹿馬鹿しくないのか。

じゃあ、逆に質問しよう。人間は何のために生きているのだ。何のために考えているのだ。毎日の生活を何のためにやっている。

いや、僕にはわからない。だから不安を感じるのだ。毎日がただ、何の目的もなく、ただ忙しにまみれて動き回っているだけだ。一体この世に何の生き甲斐があろうか。何でこの世に張りがあろう。人間の命は尊いという。意味のない人間の命など、尊いものだろうか。

それはお前に人生の目標が欠けているからだ。人生は目標なしには生活しても無意味ではなか。この世に生がある以上、それには何らかの意味がある。生を与えられた者は、その一生をえるための何らかの手段を与えられている。人間に与えられた手段は何か。それを考えてみたまえ。それは希望。第一に希望をあげなければならない。それを大別すると次のようになる。①食欲、②性欲、③意欲、④使命。私が言いたいのは最後の使命だ。①～③をかなえなければならぬのは無論、最終的には使命を果たさなければ、人間は人生を終えることを考えてはいけない。私はそのために、毎日を生きて、張りを持って生活しているのだ。

無茶な!それは嘘だ。人間にそんな使命などあるものか。教師に使命があるか。たとえあったにしろ、55歳過ぎて使命が終わったらどうする。もうその人間は生涯を終えてもいいのか。人間には使命はいろいろある。①成人になる使命、②教養を高める使命、③養育の使命、④仕事の使命。この4項目のいずれかに張りの持てない人間は、人間として価値がないのだ。この社会は定年がある。しかし仕事の使命を果たしたとして、前の三つがある。定年になったとて、立派な社会人になるため、また養育のための仕事がある。この使命の中にある人間は尊いのだ。それを終えた人間は、もっと尊いのだ。

お前の理論は分かった。でも私は不安なのだ。この不安な気持ちは何なのだ。説明してくれ、努力しても不安だ。日々の生活がだれている。どうしてくれるのだ。

お前は自分の使命—目標に迷いはないか。僕は最終的には作曲をしよう。それを使命と思っている。でもやるのが他に多すぎる。教師の仕事、社交の仕事、それで当の作曲に手がまわらい。一体いつになったら作曲できるのだ。

ははん、それでこんなとてつもない難題をぶつけたのだな。そうだ。でもただ努力せよでは片づけさせないぞ。一つの仕事には、その社会的地位が必要になってくる。現代はそういう時代のだ。専門に秀でていなければ、無論だめだが、全人的にもよくなければいけない。そこでお前のような悩みを持つのだ。じゃあ、どうすればいい。その行程をこつこつと通るより仕方がある。しかしこれだけは忘れるな。最終目標に向かって、一生を通じて目標を持ってこそ、お前の人生は美しいのだ。

1967年1月10日

日本人が伝統の中で築き上げてきた音楽は、明治以後入ってきた西洋音楽の優位性に、はばまれて発展することができず、一般庶民の間では殆ど忘れ去られた存在になっている。しかし西洋においても、そのようなことはいくらかでも見受けられることなのだ。イタリア歌劇がヨーロッパの劇場を風靡した時代もある。ドイツの音楽が2世紀もの間、全世界を支配した時代もある。現代民族主義音楽が拡大化され、ロシア、アメリカ、西欧諸国それぞれ現代的感覚とあいまって行われている時代なのだ。そして本質的にいえば、ドイツ理論に反発し、三和音的感覚から抜け出ようとし、不協和音に憧れ、不協和音の中にある音楽的調和を求めている。

私は日本音楽こそ、その可能性を秘めているとおもう。日本的感覚の独自の和音感覚、和声感覚がある。そしてその中に、全世界に風靡している現代的感覚を盛り込むのだ。それが可能なことだと思う。簡単にできることではないか。日本音楽の現代化は、日本の楽器を捨てなければ不能なのだ。音楽の本質は何か。これはその中味だと思う。それは音として聞こえてくる感覚だ。リズム、メロディー、ハーモニー、これが要素ではないか。日本のリズム、日本のメロディー、日本のハーモニー、これが日本の音楽であり、感覚なのだ。決して楽器ではない。日本の楽器は、どんなに改良しても、あの域を超えることはできない

し、現代において複雑な音楽構成に耐えうる性能は、持っていないのだ。日本の楽器は民族楽器以外の何ものでもない。日本の音楽が現代的感覚を吸収するまで、世界一流の音楽に発展するまで、現代音楽の仲間に加えることは止めた方がいい。押し入れにしまっておくのではないか。

昭和51(1976)年4月11日

私は今、秩父市立秩父第二中学校から転勤し、杉戸農業高校で新任の挨拶をした時のことを思い出しています。秩父の山奥から、この広大な関東平野にでてきて、新任の挨拶の壇上に立ち「山がないので、風景が淋しく物足りない」と言いました。当時の私は25歳、杉農に努めて満十年、私は35歳です。私自身にとって見れば、この杉戸農業高校での10年間は実に重要な意味をもっています。両親のいる故郷を離れて、半人前の若僧から一家庭を持ち、一子をもうけてこの地に根を下ろすことができました。したがって杉戸農業高校での生活を通して、私は一己の人間として如何に生きるべきかを



杉農吹奏楽部送別会(s.49年)

教えてもらったのです。私は4月1日から春日部高校に転勤しています。8日に新任の挨拶をし、9日に2年生の授業で自己紹介をしました。その中で杉戸農業高校で私が学んだこととして、二つあると話しました。一つは農業を身近な存在として感じることができる人間になったこと。二つめは杉戸農業高校生は本来あるべき高校生活を送っているということを話しました。本来あるべき高校生活とは、要するに受験地獄に毒された高校生活ではないということです。しかし本来あるべき高校生活とは言っても中味があるかは別問題です。中味があるなしは何で決まるかと言え、しっかりとした目標を持っているかで決まると思うのです。どうか諸君は高校生活に、あるいは自分の人生にしっかりとした目標を持って、目標に向かって一步一步進み、意義のある高校生活を送って頂きたいと思います。